

---

# リリカルなのは another's

フルフル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカルなのは another s

### 【Nコード】

N9551Y

### 【作者名】

フルフル

### 【あらすじ】

闇の書事件の数ヶ月後・・・

砂漠で魔法訓練をしていたフェイト・テストロッサは謎の的に襲撃される。

なのはの劇的なもう一つの物語・・・

## くプロローグく（前書き）

勢い重視のそのまま感バリバリの小説です。  
すごく深いストーリーではありません。

気楽に読める方を基本として執筆します。

ごゆるりと見ていただければ幸いです。

## くプロローグ

プロローグ。

そこには深い漆黒の海と淡い紺の夜空があった。  
夜の闇を照らすわずかな月の光。  
見渡す限りの水面。

そんな静かな夜の空に「2人」の人間がいた。

一人は青い髪のパニーテールに翠色の瞳。

背丈は180ほどの長身の人間。

一人は銀の髪セミロングに真紅の瞳。

背丈は120ほどの小さな風貌。

2人は同様に白のローブを羽織っていた。

ローブは2人の肩から足元までを隠し、夜の風に揺れている。

「もう帰りませんか？」

青い髪の間が言葉を放った。

声の高さからして、女性だ。

「帰らんもん！」

もう一人の銀髪の間もしゃべった。

声は青髪の女性より高く、やはり女性だ。

「まだ帰らん、絶対にすぐ見つけてやるもん！」

最初より大きな声で叫ぶように言った。

「とは言っても……もうカートリッジのストックがありません」

青髪の女性が淡々と言う。

「このまま長居していたら二人とも海に落ちます」

「ええもん！ウチ泳げるから！」

「……私は泳げません……それに……」

青髪の女性は指を「パチっ」と鳴らした。

女性の目の前に手の平サイズの長方形の物体が現れた。

「ここからだ……」

物体はどうやら電子辞書のような物らしく、横から開いて電子画面を指で叩いた。

「陸まで612kmありますが」

「そ、そんなに泳げるわけあらへんやんか！」

「だから、帰りましょう？」

女性は語りかけるように言った。

「……ちえっ……」

少女は残念そうに舌打ちして下をむいた。

青髪の女性と銀髪の少女は顔を一度合わせると、その場から一瞬で消えた。

2人のいた場所には、元の夜空と海があった。

## 「プロローグ」(後書き)

初めての投稿となります。

皆さんに見て頂くに値するか正直怪しい作品ですが、  
気楽に読んでいただけたらと思います。

なるべく滞らないように続けますので。

何卒よろしく願います。

「またまた大きな問題なの？」byなのは（前書き）

連作1回目です。

頑張ります。

「またまた大きな問題なの？」byなのは

闇の書事件から3ヶ月・・・

様々な思惑が交錯した悲劇の事件も終わり・・・

関わっていた人間も、今は平穩を手に入れていた。

・・・高町なのはの場合・・・

平凡な小学三年生兼ミッドチルダ式魔導師である高町なのはの朝は早い。

4：30起床。

5：00桜台・登山道。

朝は野外で魔法練習。

朝食の時間まで、約2時間のトレーニングをこなしている。

そして家に帰り家族と朝食。

両親・兄・姉の4人の家族には魔法については全て秘密。

だが不自由はない。

普通の小学生である。

「じゃ、いつてきまーすっ！」

今日も元気に登校する。

学校でもなのは普通の小学生。

魔導師の必須スキル「マルチタスク」により複数のことを一度に思考可能。

授業を聞きつつも、戦闘シミュレーションをこなしている。

家族や友達との交流の時は休憩しているが、暇さえあれば訓練訓練。

家の手伝いの無い日は夕方まで魔法練習。

「なのは、結界OKだよ」

友人兼ペット兼魔法の師匠の「ユーノ・スクライア」がなのはに伝える。

魔法防護服・バリアジャケットを装備して、上空で実践訓練。

砲撃の実射トレーニングは体力を消耗するが、それもかかさない。

「デイバイン・・・バスターッ！」

なのはの直射砲撃魔法「デイバインバスター」である。

夕食を取り、夜間にまでも訓練訓練。

夜間は高速移動& a m p・高速起動訓練。

ぐったりになるまで訓練を続ける。

8：30 入浴。

その後すぐ就寝。

これが魔導師兼小学生である高町なのはの日課である。

そして……

「ねえねえ。ユーノ君」

「なに？なのは」

「スターライトブレイカーの発射シーケンスを少しだけ変えてみたんだけど、試射してもいいかな？」

「うん、いいよ！でもブレイカーは目立つから強い結果しておくね」

スターライトブレイカーとはなのは最大最強の放射系攻撃魔法である。

「どんなふうに変えてみたの？」

「うん、ブレイカーはタメが大きいから高速戦だと使えないから・

・

「タメを縮小して起動速度を高速化したの？」

「うん！逆だよ！チャージタイムを増やして威力を大幅に上げるの」

.....

ただでさえ威力A+のブレイカーをさらに強化。  
未恐ろしくもある。

「そ、そう・・・」

ユーノも少し引いている。

「準備いーよ、なのは」

結界の準備を終えたユーノがなのはに言った。

「うん！」

「スターライトブレイカー・スタンバイ・レディ」

なのはのデバイス「レイジングハート」がカウントを始める。

10・9・8.....

なのは大丈夫かな・・・

ユーノは少し心配そうだった。

7・6・5・4.....

「これが成功したら、フェイトちゃんに勝てる！」

なのははかなり有頂天だった。

3・・・2・・・1・・・

「ユーノ君、衝撃に備えてねっ！」

「わかった！」

0・・・

「スターライトお・・・ブレイカーアーーー！」

結果。

ユーノが用意した結界は見事に内部から碎け散り。  
威力を発揮した。

魔力喪失により全治1日。

「うう・・・失敗した・・・」

「でも、威力は上がったよねえ？」

「うん、それは間違いないかな・・・」

高町なのは。

彼女は今日も、昨日より成長している。

「またまた大きな問題なの？」byなのは（後書き）

不自然極まりない小説ですいません。

おそらく読者の10割が不快感を抱くと思いますが・・・

こらえていただけると幸いです。

「アルフ、あねやってみよじよ」「ボムンハイト(前書き)

お願いします。

「アルフ、あれやってみようよ」b yフェイト

〽フェイト・T・ハラオウンの場合〽

「ハーケン・・・セイバーっ！」

いきなりのフェイトの必殺技「ハーケンセイバー」である。

ここは名もなき砂漠。

今はフェイトとその使い魔アルフの戦闘訓練の場所と化している。

「甘いよっ！」

アルフはハーケンセイバーを素早くかわし、フェイトに急接近する。

「・・・ちゃんと読んでたよ」

ハーケンセイバーをかわし、フェイトに掴み掛ろうとしていたアルフに雷の槍が襲いかかった

「プラズマランサー！？いつの間に！」

「アルフがセイバーをかわして、一瞬私から視線を外したとき」

自分から突っ込んでいったアルフは勢いを止めきれない。

そのままプラズマランサーの餌食に・・・

「使い魔の勘は伊達じゃないよ！」

なんとほぼ野生の勘でプラズマランサーをほとんどかわしきった。

「かはっ……」

だが数発は避けきれずに直撃してしまった。

「大丈夫？アルフ……」

イヤミではない、フェイトは本当にアルフの身を案じているのだ。

「全然、ピンピンしてるよ」

アルフはプラズマランサーを喰らいつつもヒョイっと起き上がった。

「それでこそ私の使い魔」

「それでこそ私のご主人様」

二人はお互いを見据えつつ、足に力を込めた。

「そろそろ終わらせるよ」

「アタシも疲れてきたからそろそろだねエ」

「バルディッシュ！」

「イエス・サー」

フェイトのデバイス「バルディッシュ」が答える。

「サンダー……ブレイドっ!」

「フェイト……強くなったね……」

アルフはそんなことを考えながらサンダーブレイドを受けきった。

そしてフェイトの目の前まで接近した。

「嘘……」

少し驚いているフェイト。

「今日はアタシの勝ちだね」

寸止めでフェイトの鳩尾に拳を突き立てているアルフが言った。

「やっぱりアルフは強いよ」

戦闘訓練を終え、アルフに話すフェイト。

「なぐに言ってるの、ソニック使わないフェイト相手でやっと互角だよ」

少し笑いながら言い返すアルフ。

「それでも、私と対等に渡り合うだけでも、アルフは強いよ」

空を見上げながら言う。

「そりゃアタシはフェイトの使い魔だからねえ、フェイトを守り、助けるのがアタシの仕事だし」

「フェイトに負けなくらいの実力じゃないと、フェイトを守れないからね」

「・・・守ってくれるの？」

アルフの目を見て、フェイトは言った。

「あ、当たり前だよ。フェイトは・・・アタシの大事なご主人様だからね」

照れくさそうに頭をかきながら、アルフは答えた。

「じゃあ、私もアルフを守るよ」

「え？」

聞き返すようにアルフは言った。

「アルフも私にとって、大切な人だから」

アルフは穏やかな表情で・・・

「・・・ありがとう、フェイト」

それだけを言った。

「そろそろ帰ろうか？」

「そうだねえ、もうかなり遅いはずだし」

二人が帰ろうとしたときにはもう空が赤く染まり、日は暮れ出していた。

「じゃあ、帰ろうアルフ」

フェイトはそう言ってアルフに背を向け、帰ろうとした。

・・・刹那・・・

「フェイト・テストロッサ、捕捉」

冷たい透き通るような声が響いた。

「申し訳ありませんが、死んでください」

その声は言い終わるより早くフェイトに攻撃を仕掛けていた。

「死ぬ・・・」

フェイトは一瞬そんな事を考えた。

相手の攻撃はまだ視界にも入っていない。

どんな攻撃かもわからない状態では回避しようがない。

振り向くより早く、声の主は手に握り締めた短剣でフェイトの首を狙っていた。

「っ……」

だが短剣は何者かの手により、フェイトの首の寸前で静止した。

「殺らせるわけ……ねえだろうがっ！」

アルフの手だ。

短剣を素手で止めたアルフの右手からは血が滴り落ちていた。

「うっらああっ！」

アルフは力の限りを左手に込めて声の主を殴り飛ばした。

声の主は40mほどぶっ飛ばされ、砂漠の砂に埋もれた。

「フェイト！大丈夫！？」

アルフは自分の怪我も意に介さず、フェイトの身を案じた。

「……大丈夫、ありがとうアルフ」

フェイトは自分の不甲斐なさを痛感していた。

「……ついさっき守ると言ったばかりなのに」

アルフの血塗れの右手を見てフェイトは言った。

「ごめんね……」

言い終わると同時に続けてフェイトは言った。

「……絶対に許さない」

フェイトはバルディッシュをザンバーフォームに起動させ、臨戦態勢を取った。

その間にぶっ飛ばされた声の主も起き上がりフェイトを見つめていた。

「貴方は何者ですか……？」

怒りを押し込め、フェイトは聞いた。

「私ですか？私は……」

声の主は羽織っていた「白いローブ」を脱ぎ捨て、名乗った。

「私は、レンリクスタ出身、フォース・クロスハント様に使える3騎士が一人」

淡々と声の主は話し始めた。

「ソードのクラスにて仕える、ミルファ・ライオラスと申します」

手に入れた平穩は・・・今また、崩れようとしていた。

「アルフ、あれやってみようよ」「ボンヘイト（後書き）」

急展開！

いきなりすぎて逆に読みにくいと思いますが引き続きお願いします。

「強いけど、すごく弱いよ、アタシもあんたも」b y アルフ (前書き)

3 話目デース。

正直勢いが強くて雑ですが気にしない！

勢いが大切ですよ。

「読者に敬意を払え」b y シグナム

すいません・・・

「強いけど、すごく弱いよ、アタシもあんたも」b yアルフ

〃〃アルフの場合〃〃

いきなり現れた襲撃者の攻撃を受けたアルフとフェイト。

そして2人の前には、フェイトでさえも感知出来なかったほどの高速の襲撃者。

ミルファ・ライオラスと名乗った人間は、見る限り女性だった。

背丈160ほど、黒髪のツインテールハカブリ、その瞳はオレンジに輝いていた。

「レンリクスタとは何ですか？」

沈黙を破ったのはフェイトだった。

「私の故郷で、フォーヌ様の支配する世界でもあります」

冷静に静かに淡々と答えるミルファ。

「なぜ私を襲ったのですか？」

「次元崩壊を止めるためです」

「次元崩壊？」

不可解なキーワードを放つミルファにフェイトは疑問符を浮かべた。

「はい」

ミルファは短くそう答えた。

「そいつとフェイトと、一体なんの関係があるって言うんだい？」

少しキツめの口調でアルフが言い返す。

「そこまで説明する義務は私にはありません」

「それなら、どうするんですか？」

ミルファに続きすぐにフェイトが言う。

「実力で排除させていただきます」

ミルファは言い終わると同時にフェイトとアルフの視界から消えていた。

「この動き・・・高速移動なんてものじゃない・・・」

フェイトは思考を巡らせ、相手の速さの源がなにかを考えていた。

「っ！・・・アルフ！」

ミルファはアルフの背後に現れて手にしていた双剣の内、短い方の

ひと振りで切りつけた。

だが、

キーンっ！

ザンバーフォームのバルディッシュの刃がそれを阻止した。

「これ以上……アルフを傷つけさせない！」

フェイトは切り返しの刃でミルファを切り裂いた。

「そんなに遅くではカスリもしませんよ」

フェイトが気づいたときには、ミルファはすでにフェイトの背後に

いた。

「……バルディッシュ」

「ハウ・キャン・アイ？」

フェイトの呼びかけにバルディッシュも反応する。

「ソニックを使うよ」

「イエス・サー！……ソニック・フォーム」

フェイトはただでさえ薄いバリアジャケットをさらに薄くし、超高速移動型のソニックフォームに姿を変えた。

「これでついていけなければ……」

「アルフ、少し離れてて」

「え？でも……」

アルフも相手の実力を理解している。

フェイト一人では手に余ると、少しは考えていた。

「大丈夫」

フェイト自信に満ちた声で返した。

「勝つから」

「……わかった」

アルフはフェイトを信じて交戦から身を引き、戦線を離脱した。

「遺言はそれでよろしいですか？」

ミルフアは右手に短剣、左手に長剣の双剣を構えフェイトを見つめる。

「ええ、あなたの動きはだいたい読めました。次は私のターンです」

フェイトも意趣返しのごとくミルファを見つめる。

「……………プラズマランサー」

フェイトは視線を外し、ミルファに向けてプラズマランサーを放った。

「この程度……………」

ミルファはまたしても目の前にはおらず、フェイトから見てほぼ真横にいた。

「終わりです」

そう言い終えると、ミルファは双振りの剣をフェイトの体に深く、刺しこんだ。

「ぐっ！……………かはっ……………」

フェイトはソニックフォームにも関わらず回避もままならず、攻撃を受けてしまった。

脇腹を刺し貫かれているのだ。流石のフェイトもダメージを隠せない。

「くっ……………」

全開で距離を置き、フェイトは呼吸を整えようとした。

「はあ、はあ……」

だが、脇腹の出血が続いている状態では回復もままならない。

しかし……

「私の勝ちです」

フェイトは少しだけ笑いながら言った。

「どこがですか？あなたは重傷、私は無傷、誰が見てもあなたの敗北です」

ミルファも勝利を確信し、言い返す。

「あなたの動きは瞬間移動でも、高速移動でもない」

フェイトは語りだした。

「あなたの動きはおそらく『速い』んじゃない。言うなれば時間制御のようなもの」

「私が放ったプラズマランサーは……あなたに当てるためのものじゃない」

「あなたが私に攻撃を仕掛けるまでのタイムラグを測るためのもの」

「ランサーを放って、まもなくあなたは私の側面にいた」

「私の前方全てに放ったプラズマランサーをかわしながら直進するのはどんな高速移動でも有り得ない」

「つまり、あなたはランサー全てを完全にかわし、尚且つ遠回りをして側面に来た」ということ」

フェイトは、解析していたのだ。

自分のダメージも承知で相手の能力を測ったのだ。

「素晴らしい解析能力ですが」

ミルファは少し驚いたような顔で言い放った。

「証拠は何もないです」

「アタシが証拠だよ！」

アルフだった。

フェイトの頼みで戦線離脱していたアルフが戻っていた。

「どうだった？アルフ」

「ああ、確かにランサーを放ったのに、ランサーもフェイトも殆ど動いていなかった」

フェイトはアルフに確認した。

アルフの離脱も作戦のうちだったのだ。

相手を見切るための、戦略だった。

「アイツは普通に歩いてフェイトの横に来てた。その間ランサーもフェイトも動いてはいなかった」

アルフは自分の見ていた戦況をフェイトに伝えた。

「……………情報以上の強さですね……………」

ミルファは表情を崩し、素直に感心した。

「ここまでとは思いませんでしたよ」

フェイトを見据え、称えた。

「ですが、その傷ではもう戦闘は不可能でしょう。解析は素晴らしいですがあなたは敗北したのです」

「だからアタシが来たのさ！」

アルフが声を張って言い放つ。

「アンタはアタシがぶっ倒す！」

アルフは拳を構え、臨戦態勢に入った。

「フェイト………ゆっくり休んでて」

「……勝てなくてゴメンね……」

「何言ってるのさ、フェイトは勝ったよ」

フェイトとアルフは会話を交わし、お互いの士気を高めた。

「あなた程度の使い魔が私に勝てるはずがありません」

「アンタさあ、色々勘違いしてるよ」

「……?」

アルフとミルファは視線を合わせて挑発し合う。

「アタシは強いよ？腕つぶしだけならフェイトにも負けない」

「そのフェイト・テストロツサは今さっき私に敗北したのですよ？」

「そこだよ、やっぱりなんにも分かってない」

「意味が分かりません」

「フェイトより強い奴なんてこの世にいない。アタシもアンタもな」

アルフは自信に満ちた声でミルファを言いくるめる。

「理解できません」

「理解できないなら、アンタは勝てない」

フェイトは少し考えていた。

「アルフ……信じてるよ」

「おそらく時間稼ぎですね？」

ミルファも思考を巡らせアルフに言う。

「こんな問答を続けるような性格には見えません」

「おや？バレちまったか……」

「やはり時間稼ぎですか」

アルフは笑いながら言う。

「そつだよ、でも少し遅かったねえ」

「？」

「アタシ達の勝ちだよ」

次の瞬間。

「ああああっ！」

ミルファを雷の柱が貫いた。

「言っただろ？フェイトより強い奴なんて、いない」

「強いけど、すごく弱いよ、アタシもあんたも」b yアルフ（後書き）

いや〜。

自分で書いてても意味がわかりにくくなる一方です。

皆様が理解してくれるか非常に気がかりですが・・・

私の表現力が乏しすぎるのが原因ですし。

自由な構想で楽しんでください。

次回、決着。

できればお楽しみに・・・

「私にも、大切な人くらいいます」b y ミルファ（前書き）

続きものです。

新展開をおたのしみに。

「私にも、大切な人くらいいます」byミルファ

〳〵ミルファの場合〳〵

ここでしばし回想に入る。

レンリクスタの王、フォース・クロスハント直属護衛騎士の三騎士が一人。

ソードのクラスにて仕えるミルファ・ライオラスは元々は騎士ではなかった。

普通の庶民の家の生まれで、少なくとも王家の騎士とは縁もゆかりもない。

そんなミルファがなぜレンリクスタの王家に使えることになったのか。

それはまた、別の場所で明らかになる。

もう少し先の話だ……………

……………ここで場面は元に戻る……………

「あああああつ！」

ミルファは予想もしなかった不可解な攻撃を受け、その場に倒れた。

「……い、一体……何が……」

ミルファは未だに攻撃がどこから来たかを把握しきれていない。

「フェイトだよ」

アルフがミルファに向けて言葉を放つ。

「アタシが時間稼ぎしてる間に、フェイトが地面を通して攻撃したのさ」

「そんなことがあるものかっ！」

ミルファは声を荒らげて抗議した。

「フェイト・テストロッサの属性は雷のハズ、地面を通して雷が伝わるはずがないっ！」

ミルファの言うとおり、水面ならまだしも地面を通して雷を伝えることは本来不可能だ。

さらに先頭訓練後で魔力があまり残っていない事を考えても、その攻撃は不可解だった。

「……これは試作技なんです」

フェイトが口を開いた。

「私も初めて実戦で使いました、名づけるなら『ガイアプラズマ』  
というところですよ」

「地面を通したのは雷ではなく、雷を収縮した魔力球です」

「半分賭けでしたが、それでも成功してよかった」

フェイトはアルフを囮にして自分の攻撃のチャンスを伺っていたのだ。

連続する作戦。

未知の相手を前にしてここまで正確な判断ができるのはフェイトだけだろう。

「そんな……私が負けるわけが……」

ミルファが消え入りそうな声で言う。

「私はソードなんだ……敵を退け……悪を砕き……主を守る騎士なんだ……」

ミルファは小さな声でブツブツとつぶやき始めた。

「私は……負けられないんだアッ！」

さっきまでとは打って変わり、声を張り上げ叫んだ。

だが、立ち上がることはできない。

至近距離からのフェイトの全力攻撃だ。

半端なダメージでは済まなかっただろう。

「往生際が悪い・・・よっ！」

「がっ！」

アルフはミルファに近づき、ミルファの腹にブローを決めた。

ミルファは気絶し、その場に伏した。

「・・・終わったね」

フェイトが息を吐きながら言った

「それよりもフェイト、そのケガ大丈夫なの！？かなりの深手だよ！」

アルフはフェイトのケガを確認して駆け寄った。

「うん、大丈夫だよ」

フェイトは静かに続けて言う。

「飛んでいくのは無理かもしれないけど、歩く分は問題ない」

フェイトは傷口を抑えながらアルフに言った。

「じゃあ、アイツはどうする?」

アルフが倒れているミルファを指さしてフェイトに言った。

「とりあえず連れて帰ろう、いきなり襲いかかられたけど事情がありそうだし」

だが。

「そつは問屋が下ろさねえよ」

「!」

フェイトとアルフは視線を同じものに向けた。

倒れているミルファの前に見たことのない人間が立っていた。

ローブは着ておらず、背丈150ほどで黄色の瞳に淡い紫髪。

「ここでアンタらをぶっ倒してフォースに届けんのは簡単だけどよ  
お」

謎の女性は話し始めた。

「それだとソードに悪いからさ、コイツにもプライドとかあるし」

「アタシはこのままソードを連れて帰るつもりだけど、どうする?」

謎の女性はフェイトを見つめて言い放った。

「……………何がですか?…」

フェイトは警戒しつつ対応した。

「いや、だから」

謎の女性は続ける。

「アタシと闘りあうか、このまま逃がしてくれんのかだよ」

……………

フェイトは考えていた。

状況からしてこの女性はミルファの仲間だろう。

話し方から見てミルファと同等か、それ以上の実力の持ち主だろう。

今の自分たちでは勝てないことは火を見るより明らかだった。

つまり……………見逃す以外の選択はない。

いや、逆に見逃してもらおうしかない。

「……………あなたの名前を教えてくださいか?」

フェイトは様々な状況を考慮し、最善の質問をしたのだろう。

だが相手はフェイトが考えるほど「賢い人間」ではなかったようだ

った。

「アタシか？」

「アタシはブレイドのクラスでフォースに使えてる三騎士・・・あめんどくせえ」

「名前だろ？」

「アタシはセルナ・クロスハントってんだ」

「あちなみにフォースの姉な」

「正直弟なんかにはえるなんてイヤなんだけどさあ」

「なんかしきたりとかそういうので決まってるんだよねー」

「面倒くさいけど、仕事だからさあ」

かなり饒舌に長々と喋ったセルナを見てフェイトとアルフは同じことを考えた。

「この人・・・使えるかもしれない」

「もう一つ、三騎士と言っていましたがあとの一人は誰なんですか？」

「ああもう一人はセイバーってクラスでなー」

案の定ペラペラと喋り出したセルナだった。

「三騎士って基本セイバー・ブレイド・ソードの3クラスで出来てさあ」

「ミルファがソード、アタシがブレイド」

「あともう一人、レイン・シールドランスって奴がセイバーのクラスでさあ」

「強さの順番付けるならセイバーがダントツで1番でえ」

「アタシとミルファがどっこいどっこいなんだけど」

「最近アタシのほうが強いかな」

セルナはしゃべり続けた。

フェイトとアルフは思った。

「この人……クビになるんじゃないかな……」

「私にも、大切な人くらいいます」b y ミルファ（後書き）

はい。

新展開です。

なんでもかんでも新展開と言えばとりあえず人気が出るというね。都市伝説があるとかないとか。

「え………クビ?」byセルナ(前書き)

よくわからないこの小説もやっとなら話目です。

だんだん複雑………というか雑になってる気がします。

お付き合いください。



それは異様な光景だった。

フェイトが倒した敵。

の仲間であるはずのセルナ。

が今フェイトとアルフと談笑している。

異様な光景としか言いようがない。

「ねえねえ、フェイト、これどうすんの？」

「わからないよ、この人凄くおしゃべりなんだもの……」

「もういい感じに回復したしき、2人でコイツやっつけようよ」

「それは少し……卑怯だよ……」

フェイトとアルフは相槌を打ちながらどうすればいいか考えていた。

しかし、その均衡は破られる。

「……テストロッサ……何をしている……」

フェイトは上空から聞こえた声に顔を向ける。

そこに居たのはヴォルケンリッター・炎の将シグナムだった。

「シグナム……？」

フェイトは少し驚きつつシグナムを確認した。

「・・・誰？」

セルナはフェイトを見つめながら質問していた。

その場にいる人間をを整理してみよう。

気絶しているミルファ。

無傷元気のセルナ。

8割形回復しているフェイト。

ほぼ全回復済のアルフ。

今来たばかりのシグナム。

少し混乱しそうなくらい珍しい組み合わせだ。

「シグナム・・・どうしてここに？」

「帰りが遅いから迎えに行つて欲しいと、主が」

「あつ、そうか・・・もう夜だもんね」

「ああ、主も心配している。早く帰るぞ」

フェイトはそそくさと帰る仕草をした。

「行こう、アルフ」

「待たんかいつ！」

セルナはツツこんだ。

「いきなり帰るなんてズルイ、もっと話そうよフェイト」

なんだか甘える子供のようだった。

「

そういえばその二人は誰だ？一人は気絶してるようだが・・・」

シグナムは見たことのない二人組を見ながら訪ねた。

「その気絶してる人は、私に襲いかかってきてなんとか倒した」

「敵かつ!？」

シグナムは自らの専用デバイス「レヴァンティン」を構えて戦闘姿勢になった。

「多分敵だと思うけど・・・ちょっと断言しにくい」

「どういふことだ」

「もう一人の人はなんだか色々情報くれたし・・・」

「事情が飲み込めんな」

フェイトはここで起きた一部始終をシグナムに伝えた。

「なるほどな・・・それなら話は早い」

シグナムは姿勢を崩さずにセルナに向かって言った。

「その気絶してる奴を背負って、我らと共に来い」

「なんで？」

セルナはとぼけた顔で言い返した。

「仮にもこちらは襲撃を受けている、詳しい事情を聞くまで野放しにはできん」

シグナムは極々当たり前の事を言った。

「もし断ったら？」

セルナは挑戦的な顔で言い返したが・・・

「私とテストロッサで力づくで連れていく」

「ごめんなさい、行きます」

ミルファとフェイトはほぼ互角。

更にシグナムはフェイトと互角なのだ。

セルナが戦って勝つ確率は0に等しいだろう。

「主に余計な心配をかけたくない、すぐ戻るぞ」

「はい」

フェイトとシグナム、アルフは2人の襲撃者を連れて帰っていった。

~~~~~

場所は変わり、アースラ内部・・・

「こっから出せええええっ！」

戦艦内には大きな声が響いていた。

「アタシは関係無いじゃんかっ！ミルファだけでいいじゃないかあ  
あっ！」

勿論その声の主はセルナだった。

「セルナ、うるさいです」

今度はミルファの声だ。

今2人はアースラ内の牢屋に入れられていた。

罪状は「フェイト・テストロツサ襲撃」だった。

フェイトはなぜか弁護していたが、結果的に2人の目的が明確になるまでの監禁処置で決まった。

「バカヤロー！元はといえばお前が負けたせいでアタシまで捕まってるんだろっが」

「し、失礼な。負けてなどいません！ちょっと油断しただけです！」

「だから油断したから負けたんだろっ！」

「次は勝ちますよっ！」

「どーやってだよ！？アタシら今檻ん中なんだぞ！」

2人はデバイスを持ってはおらず、回収された私物はミルファの双剣だけだった。

「うるせーぞ、大人しくしてろ」

この声のぬしはミルファでもセルナでもない。

ヴォルケンリッター・鉄鎚の騎士ヴィータだ。

「まったく、シグナムの奴・・・いきなり呼び出してコイツら見張ってるのか・・・」

「お前も子供のクセに偉そうにするな、敬語使えっ！」

セルナは気が立っていたのか、ヴィータを挑発した。

「ああ！？アタシは成長しただけだ！オメエらよりよっぽど年上なんだよ！」

ヴィータもシグナムに無理言われて気が立っていた。

「じゃあオバサンですね……」

ミルファが小声でつぶやいた。

「テメエー表出る！叩き潰してやる！」

「だからでられたらとっくに出てんだよ！」

艦内には数人の怒声が鳴り響き続けた。

~~~~~

「フェイトちゃん、傷は大丈夫なの？」

「うん……もう完治してる、大丈夫だよ。ありがとう、なのは」

場所は又変わり、アースラ艦内専門治療室。

そこにはなのは・フェイト・アルフ・シグナム・ザフィーラ・シャ

マル・はやて・クロノがいた。

フェイトはシグナムと一緒に戻った後、大体の経緯をみんなに説明した。

自分が襲われたこと。

相手が何者なのか。

誰の指図で来たのか。

もろもろを説明した。

傷は治りかけていたものの、血塗れのバリアジャケットのフェイトを見たなのはは。

ミルファとセルナにも同じ痛みを受けてもらおう、と意趣返しに行きかけた。

フェイトの説得でなんとか落ち着いたなのはは、ずっと休んでいるフェイトの傍にいた。

「アイツら、あのままでもいいのかな？」

アルフが独りごちのようにつぶやいた。

「なぜテスタロッサを狙ったかを奴らは全く喋らなかった、ならば様子を見るしかないだろう」

シグナムがそれに応えるように話す。

「そもそもエンリクスタとはどこの次元の国なんだ？」

シグナムは続けて質問をした。

「うーん・・・それが調べたけどよくわからなのよ・・・」

シャマルがそれに応えた。

「本人たちに聞くのが一番早いんじゃないのか？」

クロノも話し合いに参加してきた。

「だが、素直に答えはしないだろう」

ザフィーラがそれに答える。

「まあ、ええやん。気にしてもしょうがないよ？」

はやてがおっとりとした声でまとめる。

「でもやっぱり放ってはおけないよ」

なのはは少し低めの声で言った。

「フェイトちゃんはかなり重傷だったんだよ？それを有耶無耶には出来ないよ・・・」

部屋は少し険悪なムードが漂っていた。

「とにかくだ」

シグナムが大きめの声で喋り始めた。

「なのはの気持ちも分からなくはない、だが焦りは必ず失敗に繋がる」

「落ち着いて対処するのが、奴らの動機を知る一番の近道だ」

「分かってくれるか？なのは」

なのははそれに不満げに答えた。

「はい……………」

言い聞かせるようになのはに話しかけたシグナムは……

「だが、それでは気が晴れないのは私も同じだ」

「だから……………」

~~~~~

場所は又又移り、エンリクスタ中心施設。

そのなかでも中心に位置する「エンリクスタビル」

そこでは2人の人間が口論をしていた。

「どういうことだ！？ソードを押したのはお前だろう、セイバー！」

「申し訳ありません、我が主」

「申し訳ありませんで済むか！おまけに何だあれは！何で迎えのブレイドまで捕まるんだ！？」

「誠に申し訳ありません、我が主」

「本当に意味が分からない！あの2人はお前が直々に育てた強者だろう！？」

「心から誠に申し訳なく思います、我が主」

「もういい！シザーズとスライサーはどこだ！？」

「現在搜索中ではありますが、スライサーの能力でおそらく見つかることはないかと」

「全く……何もかも想定外のことばかりだ……」

そんなやり取りがあつた事はこの2人意外に知る者はいない。

一人はセイバー。

もう一人はフォースクロスハント。

両名共にエンリクスタの屈指の実力者だ。

「私が直接出向きましようか？」

セイバーはフォースに向けて話しかけた。

「いや、俺も行こう」

「私が負けると申されますか？」

少し力の入った声でフォースに言うセイバー。

「お前が負けるとは思わない、なにせお前は俺より強いしな」

そう言うとフォースは間を開けてさらに続けた。

「だが相手はソードとブレイドを倒せるほどの実力を持つと考えるのが自然だ」

「そう考えると、お前だけでは辛い闘いになるだろう。これ以上家臣を失うわけにはいかない」

「分かりました、我が主」

「出るぞ、久々の戦だ」

「はい」

エンリクスタのNo.1とNo.2が今、戦いの場に決意を向ける。

~~~~~

「バーカ、バーカ、チービ！」

「何だとコルアツ！」

ヴィータとセルナの争いは未だに続いていた・・・

「え………クビ?」byセルナ(後書き)

毎度有難うございます。

新キャラばかりで本編とのつながり0パーセントですが……

楽しんでいただけたらいいなと思います。

「違う、大切な家族だ」 by フォース（前書き）

更新が遅れてすみません。

なんかお気に入りもなくて人気ないのかな・・・

なんて思ったり。

でもそういうことはエピソードまで書いてから考えるのが礼儀かな。

とまっているので、読者様がいなくても書き続けようと思います。

始まります。

「違う、大切な家族だ」byフォース

「すいませ〜ん、誰かいませんか？」

アースラ内に声が響く。

声の主は「フォース・クロスハント」

転移魔法によりアースラ内に来たようである。

「主、自ら所在を明らかにするのは敵地にて相応しくないかと」

「いいのだ、別に襲撃に来たわけではない」

「承知しました」

勿論アースラ内は混乱している。

「敵が人質を取り返しに来た」

という話が艦内を飛び交っていた。

~~~~~

「ど〜しど〜しか？」

はやてが周りに問いかける。

「何か企んでるんじゃないのか？」

クロノは神妙な面持ちで話す。

「でも・・・2人とも結構ノリノリだよ？」

ユ一ノは監視カメラの映像に映る2人を見て答える。

「私が行こう」

シグナムが立ち上がった。

「私も行きます！」

なのはも立ち上がった。

「俺も行こう」

ザフィーラが静かに言った。

「では3人で行こう」

シグナムがまとめるように言う。

「シグナム、大丈夫？」

「はい、話し合いで済めば連れてきます」

はやてがシグナムの心配をしつつ、フェイトも心配した。

「気を付けて・・・2人とも、かなり・・・」

「ああ、お前がそこまでやられる程だ、油断はしていない」

かくしてシグナム達はフォーズ達との話し合い目的で向かった。

~~~~~

場所は移り、アースラ艦内、茶室。

少し狭いが6〜7人程の人間が入るだけなら十分な広さだ。

そしてそこには「5人」の人間が居た。

一人はフォース・クロスハント

一人はセイバー

一人はシグナム

一人はザファイラ

一人は高町なのはだ。

ここに来た経緯はこのような感じだ。

「話がある、ついてこい」

と、シグナムが言い。

「かまわん、案内しろ」

と、フォースが返した。

それだけで今の現状に至る。

全員が正座で話し合いに望んでいる。

そして口を切ったのはセイバーだった。

「お初に、魔導師の皆様」

そして続けて話す。

「私はフォース様に仕える三騎士が一人にしてレンリクスタ最強を  
自負しております」

「セイバーのクラスにて仕える、レイン・シェードランスと申しま  
す」

「我はフォース・クロスハント、エンリクスタの王だ」

「私はシグナム」

「俺はザフィーラだ」

「高町……なのはです……」

セイバーが喋ったことで全員が自己紹介を終えることができた。

「こちらとしては聞きたいことがある」

シグナムが喋り出す。

「なんでも聞け、だがまずはミルファとセルナの無事を確認させろ」

フォースが冷ややかな声で言い放つ。

「……いいだろう」

シグナムは通信でヴィータに2人を連れてくるように伝えた。

来た3人はなぜか傷だらけだった。

「……ヴィータ、何があった」

「なんもねーよ!」

シグナムは大方予想がついたのでそれ以上の追求はしなかった。

「さあ、2人の無事は確認しただろう、次はこちらの……」

シグナムが言いかけたその時……

「お姉ちゃん！」

フォースがセルナに飛びついた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その場にいた全員が目をそらした。

「フォース・・・・・・・・みんなが見てますよ・・・」

セルナが小さな声で伝えるとフォースは我に帰り、続けた。

「何も見てないよな」

「・・・・・・・・ああ、とにかく本題に入りたいのだが」

シグナムはさっきの事を忘れ、話を進めていく・・・・・・・・

「違う、大切な家族だ」byフォース（後書き）

ごめんなさい。

体調が優れず短めの投稿となります。

バラバラでわかりにくいですが・・・

ご容赦ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9551y/>

---

リリカルなのは another's

2011年12月11日01時48分発行